

思春期の注意欠如・多動傾向と 情緒の問題に関する縦断研究 —学校ライフイベント、自尊感情との関連—

○齊藤 彩 (国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所)

菅原ますみ (お茶の水女子大学大学院)

キーワード：注意欠如・多動傾向、情緒の問題、思春期

問題と目的

注意欠如・多動性障害 (ADHD) の子どもは、環境との相互作用により、二次的な精神医学的併存症、すなわち二次障害に直面することが多い (齊藤・青木, 2010)。その一群として、気分障害や不安障害などの情緒に関連する障害が挙げられる (Ollendick et al., 2008)。一方、ADHD の症状は連続体として捉えられることが指摘されており (McLennan, 2016)、医学的な ADHD の診断に限らず、注意欠如・多動傾向が高い子どもについても、二次的な情緒の問題を抱えやすいことが想定される。本邦の子どもの注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連について、例えば、中学生の注意欠如・多動傾向が、学業や友人関係のライフイベント、自尊感情を媒介して情緒の問題へと関連するメカニズムが報告されているものの (齊藤, 2015)、縦断的関連のメカニズムについては検討されていない。また、学校ライフイベントのうち、ポジティブイベントとネガティブイベントのそれぞれの効果については独立に検討されていない。そこで、本研究では、“子どもの注意欠如・多動傾向の高さが、学校でのポジティブイベントの少なさ、ネガティブイベントの多さと関連し、自尊感情の低さを媒介して、情緒の問題の高さへと関連する”という仮説について 3 時点の縦断データを用いて検討することとした。

方 法

調査対象者と手続き：子どもの養育環境に関する縦断研究に登録された家庭において、小学校 5 年生時 (Time 1)、小学校 6 年生時 (Time 2)、中学校 1 年生時 (Time 3) の 3 時点のデータが揃った子ども 202 名とその母親 202 名の回答を分析の対象とした。2014 年 3 月、2015 年 2 月、2015 年 12 月に、郵送により各質問紙の配付・回収を行った。測定尺度：①注意欠如・多動傾向 ADHD Rating Scale 日本語版 (DuPaul et al., 1998, 市川・田中 監

修, 2008) 保護者評定版 (18 項目, 4 件法)。②学校ライフイベント ポジティブイベント 5 項目、ネガティブイベント 4 項目を作成 (2 件法)。③自尊感情 Kid-KINDL^R questionnaire (Ravens-Sieberger & Bullinger, 1998) 日本語版 (柴田ら, 2003) のうち「自尊感情」の下位尺度 (4 項目, 4 件法)。④情緒の問題 Child Behavior Checklist (CBCL; Achenbach, 1991) 4~18 歳児・養育者評定版の日本語版 (戸ヶ崎・坂野, 1998) のうち、不安・抑うつに関する下位尺度 (14 項目, 3 件法)。

結果と考察

性別を統制した上での各変数間の偏相関係数を求めたところ、Time 1 の注意欠如・多動傾向の高さは Time 1 のポジティブイベントの少なさおよびネガティブイベントの多さと関連を示し、これらの Time 1 のイベントは Time 2 の自尊感情の低さへと関連を示した。さらに、Time 2 の自尊感情は、Time 3 の情緒の問題との間に負の関連を示した。仮説モデルを検討するためのパス解析を行ったところ (Figure 1)、良好なモデル適合度が示され、男女共に同一の有意なパスが確認された。

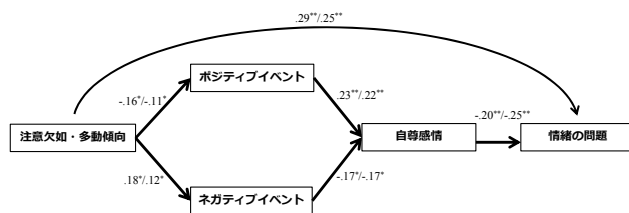


Figure 1 パス解析の結果
 $\chi^2(17) = 16.73, p = .47, CFI = 1.00, GFI = .968, AGFI = .943, RMSEA = .000$
^{*} $p < .05$, ^{**} $p < .01$ 右が男子、左が女子の標準偏回帰係数。有意でないパスおよび誤差は省略。

注意欠如・多動傾向が高い思春期の子どもにおける情緒の問題を予防、軽減するためには、学校におけるポジティブイベントの増加やネガティブイベントの減少につながるような支援、また自尊感情を向上させるような取り組みが重要である可能性が示唆された。